遠野文化研究センターだより　とおのじん　－其の25－

遠野人

遠野文化研究センターの活動に興味を持っていただけるような情報をお届けしています。今月は「遠野物語初稿本三部作」についてです。

★筆者　木瀬（きせ）　公二（こうじ）

遠野文化研究センター研究員、朝日新聞・社友記者。1948年東京生まれ。73年朝日新聞入社。元朝日新聞盛岡総局長。08年に達曽部に移住。著書に遠野物語関連の『119のはなし』など。

『遠野物語』の初版本

初めて『遠野物語』を読んだとき、どうしても腑（ふ）に落ちないことがあった。序文の３行目である。柳田国男が、佐々木喜善から聞いた話を「一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり」と記しているところだ。

普通の日本語では、「一字一句も」に続く言葉は「違わず」や「変えず」である。聞いた話そのままであることを強調するための言い回しだ。それを「感じたるまま」と続けたのでは「一字一句」を使った意味がない。学校の国語のテストでこのように書けば、間違いなく×がつくはずである。

まさか柳田国男はそんなことを知らずに書いたとは思えない。ならばどんな理由でそうしたのか。遠野に移り住み、何度か『遠野物語』を再読しているうちに、「何だ、そんなことだったのか」と気づいた。柳田が「喜善が言った通りには書かずに、私が受け取ったままを誠実に書きました」という宣言文なのだ。

柳田は、喜善から遠野のお化け話を聞いた。それをメモにして残した。この時点では「一字一句も違わず」に近いメモだったと思う。それが徐々に変わっていく。まずメモを読み返し整理し①毛筆で書いた②それを推敲し、印刷するために原稿用紙にペン字で書いた③ゲラとして戻ってきたそれに赤インクで直しを入れた。その作業をする度に、喜善から聞いたままの話が、柳田の「感じたるまま」の文章に変わっていった。私たちがいま読んでいるのは、赤インクで直しが入ったあとの文章である。この①から③は「遠野物語初稿本三部作」と呼ばれている。

これらのことを頭にいれて『遠野物語』を読むと、多くの推測ができる。まず第１話。お化け話をしに行った喜善が最初に「遠野郷は今の陸中上閉伊郡の西の～」などと遠野の位置関係を説明したとは思えない。出版を頭に置いた柳田が、遠野を知らない人のために書き加えたのだと思える。そして２話目。皆さんよくご承知の「遠野三山」の話である。末娘は姉の胸に下りた霊華を盗み（これ、窃盗犯です）、早池峰山を手に入れたわけだが、そんな悪いことをしても罰が当たらないどころか、一番いい山を手に入れたというのは納得しがたい話なのである。

これをどう読めばいいのか。私は漫画家の水木しげるさんや「まんが日本昔ばなし」の声優だった常田富士男（ときたふじお）さんらに聞きまくったことがある。民俗学者の谷川健一（たにがわけんいち）さんにはご一緒したシンポジウムの楽屋で聞いた。神様のことは神官にと、日光東照宮の博物館長と図書館長を兼ねたような立場にいた元文庫長にも聞いた。それである程度の理解はできた。しかしこの第２話も、柳田が「感じたるまま」書いた文章だった。毛筆本とは違うのである。三浦佑之（すけゆき）・遠野文化研究センター顧問が教えてくれた。

遠野物語初稿本三部作

いずれにせよ、三部作はどこがどう違うのか。そこがはっきりすれば、私たちの遠野に対する考え方も捉え方も異なってくるかもしれない。幸いなことに三部作は、遠野市立博物館が持っている。しかし市の宝物として文化財に指定されているため、見るだけでも手続きが必要だ。原本が傷むのを防ぐためコピーも取らせてもらえない。今年は遠野物語発刊111年。来年は柳田国男没後60年。これを機会にもう少し広く三部作が読めるようになれば、新たな遠野が見えてくる気がするのである。

★問い合わせ：遠野市東舘町3-9（遠野市立博物館内）/TEL：62-2340/FAX：62-5758/MAIL：tono100@city.tono.iwate.jp

遠野暮らし＆活動報告 VoL.27

キラリ！ 地域おこし協力隊

遠野に移り住み活動する「地域おこし協力隊」の活動の様子や関連イベント情報などをお伝えします。

遠野ファンを増やす アイデアを提案していきたい

只松（ただまつ）　靖浩（やすひろ）隊員　福岡県出身・43歳（2020年10月着任）

移住し、挑戦中！

只松さんのプロジェクト

「観光・物産振興」

（商品開発・ローカルプロデューサー）

Q遠野に移住する前はどんなことをしていましたか？

出身地・福岡県の印刷会社で営業を務め、紙媒体を中心としたクライアント（広告主）の販売促進ツール作りに従事してきました。2009年、会社に勤めながら週末だけ営業する文具店を妻と共に開店。2016年には印刷会社を退職し、ドイツのベルリンに文具店を移転。約3年間営業してきました。帰国後は、埼玉県の三芳町文化会館で勤務。企画スタッフとしてクラシック音楽や地域の伝統芸能の公演など約20のイベントを運営してきました。

Q遠野に来てからどんな活動をしていますか？

観光・物産振興に向けて、まずは色々なところに出向いて遠野のことを知ることから始めています。▽神楽の練習▽きのこ採り▽稲刈り▽薪割り▽熊脂作り▽ホップ和紙作り―などを体験させてもらいました。また、道の駅遠野風の丘を中心に、産直や伝承園、ふるさと村などの観光施設に足を運び、自分なりに気付いたことをメモしています。いろいろな場所や人との出会いから、貴重な時間を過ごすことができています。

Q今後の目標を教えてください

活動していくうえで、遠野の人たちとできるだけたくさん触れ合い、まずは顔を覚えてもらうことが重要だと感じています。これまで開発された遠野の商品の話も聞いてみたいです。遠野で暮らす中で、自分なりに気付いたことやアイデアを積極的に提案していきたいと思っています。とりわけ、印刷会社での営業活動や自身で経営してきた文具店、文化会館で培ったノウハウやスキルを取り入れながら、遠野のファンが今以上に増えるよう努めていきたいと思っています。

1＿只松靖浩さん（改修中の道の駅遠野風の丘にて）
2＿大出の早池峰交流館での神楽の稽古風景。想像以上に激しい動きで筋肉痛に　3＿熊の脂を小さく切り分ける只松さん。初めての熊脂作りを体験しました

宮本隊員

つくる大学

宮本拓海（たくみ）隊員が運営に携わっている「つくる大学」は令和２年度、内閣府の関係人口創出・拡大のための提案型モデルの採択を受け、社会変化により新たに必要となった知識やスキルを互いに学ぶ場の創出に取り組んでいます。

講座やイベント情報掲載

詳しくは、つくる大学ホームページ（左記ＱＲコード読み取り）

■つくる大学運営事務局

Mail ➡ tsukuru-univ@nextcommons.co.jp

HP ➡ https://note.com/tsukuru_univ